


螢一さんたちと市宮プールに行きました。  
若い男の方たちがたくさんおられて、リクエストにお応えして  
水着を脱いで裸をお見せしました。そのあとは全裸のままプールで泳ぎ、  
水の中でたくさんの方と交わりました。





自動車部の夏のイベントに出演した時、  
冷たく冷やしたものをいただきました。  
シースルーの衣装はみなさんにとても  
喜んでいただけますけど、やっぱり今回も  
最後は全裸になってしまいました。



朝からずっとみなさんと愉しんでいたのですが、いったん湯浴みをして縁側で一息ついている処です。いつもは恥ずかしい格好のところを写されることが多いので自然なところを撮っていただけるとはとても嬉しいです。でもこのあと我慢できなくなって自分から脚を拡げてみっともない格好を披露してしまいました。

まだベルダンディーが肉欲の悦びを男たちに求める前、自らの淫欲を抑えることができず、法印結界を張った一室で猿のように自慰に耽っていた。



この行いはやがてエスカレートしていき、山の中を全裸で徘徊しながら自らを慰めたり、用事を設けては地方へ旅行し行きずりの男たちに身を解放するようになる。

「あ、螢一さん、おかえりなさい♡」  
「あとで夕飯をお持ちしますのでお客様がお帰りになるまで待っていてくださいね」



男たちは夜遅くになっても一向に帰る様子はなく、朝方通勤の際に見かけた時は茶の間で  
大股を揺り、腰を抜かした様子で男たちの精液を股や尻穴から垂れ流しながら失神していた。


この頃になるとベルダンディーもすっかり手慣れた様子となり、海や盛り場などに出掛けては後腐れの無さそうな男を探しては交尾に耽った。時には見かけた男の前で全裸になり、その場での快楽を貪欲に求めることもあった。



刺激と興奮を求めて高級サロンにデビューしてから数年、ベルダンディーは  
今では客も取れず、安キヤバレーに流しの芸人として登場して  
結合部を披露して小銭を稼ぐまでに落ちぶれていた。

「では、次にこの火花をお尻の穴で  
打ち上げて見せますね♡  
お気に召しましたらこちらの箱に  
お心付けを…」





ベルダンディーは時折盛り場の路地裏を全裸で徘徊し、その場で複数の男性との性交を愉しむようになった。避妊も行わず毎晩精液の海を満喫したため当然のように妊娠したが、腹ボテの姿になっても路地裏での徘徊は続きひたすら快楽に浸り続ける妊婦女神の噂は街中に広がった。

「中に、中にびゅ〜って発射してください♡  
みなさんの愛情をいっぱい注入してくださいね♡」



「はい♡おまんこに出してくださいね。赤ちゃん墮ろすのとっても大好き♡もう数えきれないくらい殺しちゃってますから(笑) 器具で赤ちゃんを搔き出してもらうの、麻酔をしててもわかるんですよ。いつもぞくぞくしちゃいます♡」

「あ、赤ちゃんを墮ろしてることは螢一さんには言わないでくださいね♡」